

私のつづやき 『学びのプロローグ』から 白玄 丹波

去る三月二〇日、令和五年度の札幌大学卒業式の懇親会場で放映された、学生実行委員会が撮影制作したという専攻長メッセージを私も視聴させて頂いた。山田隆教授のご厚意で送って頂いたウェブ上映像のものである。

山田教授からは卒業生へ贈る挨拶のなかに「Век жизни, век учись. (生きている限り勉強)」の言葉があり、ここで学ぶとは何かを考えてみた。

三歳児も小学生も中学生も高校生も大学生も、そして大人も学ぶ。一生学ぶのが人間。学ぶとは……「何か面白いことないかいな!？」と探し続けることだろうか。続けるから一生学び続けられる。学びや好奇心を失ってしまうと泳いでいないマグロと同じかも。マグロは生まれて育つと命が尽きるまで時速一六〇キロで泳ぐ。鯛たは生まれてしばらくするとほとんどがメスになる。成熟するにつれ雄雌がほぼ半数になる。それは運命。人間も一人ひとり運命があると思う。

自分の運命はどういうシナリオになるのか分からない。最後まで分からないシナリオだから命が尽きるまで「面白いもの探し」をやめる気はない。自分がたとえどんな役割・立場であっても所詮、自分の知っていることなんて地球の歴史四六億年に比べればしれている。しれているからいろいろなことを知りたい。そしてそれを誰かに伝えていく。それが教えることに

もなるのだろうか。伝え続けるには口頭伝承より文字による伝承のほうが後の世代には伝わる。好奇心は本の世界からも得られる。音楽の世界からも得られるし、スポーツの世界からも得られる。そして自分の趣味の世界からも得られる。

《最近感激した話から》

皆さんはハリウッド映画のエンドロールで、字幕担当 Natsuko Toda の名前がクレジットされているのを見たことがあるでしょう。最近であれば昨年夏に公開になった『ミッション・インポッシブル』だとか……。確かにこの作品を最後に戸田奈津子さんは八八歳になったので、後進に道を譲るため字幕の仕事を辞めると言われていたように思う。

戸田さんが若者の「やりたいことが見つからない」という質問に、このように答えられておられた。「やりたいことは、好きなこと。好きなことは楽しいこと。楽しいことをきっちり育てれば豊かになれる。そのためには何があってもあきらめてはいけない」と。彼女は字幕の仕事が入ってきた時に、一週間で一本の映画の字幕を完成させる。長くても一〇日で仕上げる。しかもその字幕の仕事勝ち取るために、二〇年間翻訳のアルバイトに勤いそ

しんだのだそうだ。当時フランシス・コッポラ監督がマニラとサンフランシスコを股またにかけて映画の製作をしていた。その途中に日本に寄った時、彼女はコッポラ監督の通訳を何度もしていた。コッポラ監督は、頑張っている彼女を見て「字幕の仕事はいかがか」と映画の担当者に声をかけてくれ、彼女は字幕の仕事を手に入れることになったそうだ。その時彼女は四〇歳。そして、戸田奈津子を世に送り出したその映画は『地獄の黙示録』だ。

字幕の仕事は特殊で、一秒間に三文字入れていくのが原則らしい。俳優の唇の動きに合わせるためだ。キャストになったつもりで、例えばラブシーンなんかでは、女性を口説く男性になったつもりで翻訳するので感情が必要だと。そのためAIの翻訳のように絶対できないと。だから自分は頭の中でお芝居するのがとても楽しく面白いと。そのプロ根性と人間らしさに感激した。またこんなことも言っている。「大スターほど謙虚で優しく素晴らしい。そこにさらに才能がある。」「好きな事はどんな時間がかかってもあきらめない。それが普通にできること……。特にトム・クルーズとは親しくしている」

この国は、自分で目標をもって転職する人にとっては時間を必要とする。あきらめてしまうと、自分からせっかく乗ったレールを降りることになる。チャンスはいつやってくるか分からない。しかしチャンスが来る時まで続けるということが、あきらめないということになると思う。まあ、これま

でのさまざまな思いがあっても、何をやっているとしても以下の通り「背筋を伸ばし前を向いて歩き続けよう。結果はすべて自分の歩いた轍わだち。轍は自分の生きざま」――

《経済と教育と環境》

アントニ・ガウディのサグラダ・ファミリアをご存じでしょう。五年前の入場料は一五ユーロだった。今は二六ユーロで大聖堂のみの入場料は約四一〇〇円位だ。五年間で一〇ユーロの値上げだ。塔を含めての入場料は三六ユーロで五七〇〇円弱。サグラダ・ファミリア以外のガウディの作品の見どころを回ると大体一五〇〇円位になる。これをどう受け止めるでしょう。ちなみに金閣寺の拝観料は最近四〇〇円から五〇〇円になった。京都の寺院は軒並み一〇〇円から二〇〇円程度、奈良の法隆寺は共通拝観料が五〇〇円値上げである。

単純比較はできないが日本円ベースでOECDのデータで比較するとヨーロッパの中で比較的低いと言われるスペインの年間賃金は、日本を年間二〇万円以上も上回っている。すなわち世界のトレンドは賃金も上昇傾向、物価も上昇のインフレ傾向なのである。対して日本の賃金はこの三〇年以上横ばい。ようやく今春闘で大企業の三三年ぶりの賃上げが相次いでいるが、我が国の産業構造の特徴ともいえる企業全体に占める九九パーセント以上の中小企業のそれは追いついていない。

一方、コロナを経て物価上昇がとまらないスタグフレーション傾向。大好きな鰻重も以前は高くても、まるまる一尾で二〇〇〇円台だったものが、知らない間に五〇〇〇円から六〇〇〇円、天然ウナギだと一〇〇〇〇円するものもある。「どんな人が食べはるんやろか、コアナウナギファンやろか」……何とか欧米並みに戻る経済力がほしいものである。

サグラダ・ファミリアで四五年も教会の彫刻に関わっておられる人がいる。外尾悦郎さんそとおえつろうという方だ。四五年たった今七〇歳を過ぎてもまだサグラダ・ファミリアの彫刻作成の仕事をしておられる。「約半世紀も修理にかける情熱は、ほんますばらしいわ」と尊敬する。

日本は学歴社会と言うが、ヨーロッパでは有名な企業の就職条件は大学博士卒以上、そこで働く人も母語を除き三か国語以上の読み書きができる人が多い。ヨーロッパの言語は類似性があるので単純比較はいけないかもしれないが、そういう意味では日本よりはるかに学歴主義である。それでも賃金は学校のグレードで決まるのではなく、業務の専門性にどれだけ寄与するかの能力主義で決まる。批評家ではないのであれこれ言及しないが、こんな話もあるということにとどめる。

この話を自分に返してみると、様々な情報を整理しながら世の中の動きを理解するために、アンテナを高くすることに尽きるところ。年齢に関係なく極力新しい流れには敏感かつ注目する姿勢は崩さないスタンスでありたい。今の瞬間を充実させることが自分にも周囲にも何かを残すことにつ

ながるものと思う。何かを見つけようとする好奇心、探求心は人間が生きている間は止めてはならぬものだとは自分は考えている。結果が見えることも大切だが、目に見えない小さな変化にも毎日気づくことの大切さを楽しめるように生きたい。それは人の変化だけでなく周囲の自然の変化、自身の体力や体調の変化にも動揺することなく心して受け入れるということである。すべて自分がやってきた道が何らかの変化をもたらす。だからそのままを受け入れ考え、今日より明日を充実させようと思う。

しんどいことや面倒なことを投げ出してしまふのは簡単だ。思い通りにならないことやできないことを誰かのせいにするのも簡単だ。しかし今まで自分がやってきたものを途中で理由をつけてやめてしまふ時間が、自分にとって残念でもつたいたない時間の使い方であると、ようやく分かるような気がしてきた。「もうこれでええわ」とか「面白いわ」と思うと、何となく元気も出ないし体調も少し下がる気がする。これは誰かに指示を出そうという意味ではなく、自分自身がどうしたらずつと若い気持ちで元気でいられるかに対する自己問答である。自分で、「もうあかん」と決めることなく、少しでいいから自分を動かし続けることが全てにつながるのかもしれないということである。だから好きな事はより探究し、嫌いな事も最低限は受け入れるため「心のダム」が枯渇こかつしないよう心の手入れを続けていこうと思っている。どうか皆様も忙しいので関係ないと思ってしまうことなく「心のダム」をいっぱい……。

《あえて厳しい指導について》

三月二〇日から韓国高尺スカイドームでのドジャースVSパドレスMLB開幕一戦、結果一対一を終え、ようやく『水源地』第六号への寄稿文執筆にとりかかった。四月一〇日締め切り日に若干の余裕をもって、日本プロ野球開幕日、三月三〇日までには書き上げたいと追い込み中である。

元メジャーリーガーのイチロー氏が最近こんなコメントを出している。「最近では指導する側が厳しい。二〇二〇年の秋に智辯和歌山の野球指導に行った時に、旧来的な指導は時代遅れという流れの中、厳しく指導できないとなると、とどのつまり高校生に「自分たちで自分に厳しくしろ」ということを強いなければならなかった。それは酷なことであると感じた。また子どもたちは旧来的な指導を受けず、子どもにとって良いことばかりのように一見思える。それが優しさに思えるが、本当は異なるのだ」

それはどうということかという、子どもたちに「むきだしの自己責任」を押し付けてしまっているということになると。かつては子どもの近くにいた厳しい大人によって、怠け心を引き上げられチームの底上げができ、ある程度のチームのクオリティを保つことができた。しかし今はそういう大人がいないので自分でコントロールできないものは、放置されたままになっ

ていると。これを企業での人材教育、学校教育に置き換えると、教育者や指導者と

強い人を選ばざるを得ない。そうでない人は、表現は悪いが腫れ物扱いを

してそれなりに快適に過ごせるように、配慮して通り過ぎることになってしまうということになるのだろうか。それにより知らずのうちに、様々な経験値や成長度に大きな差が生まれてしまっていて、出来る人は何でもできるしチャンスを得る機会も増えるが、そうでない人はストレスも少ない代わりに、「何でもとやらしてくれなかったんや」という機会も気づきも無くなってしまうのだろう。だから世の中の構造は人材的に言うと、二極化の時代に知らずのうちになってしまう。思い当たることないだろうか。例えば私の生家近隣に母方の祖母を持つ芦田愛菜さん。大学でしっかり学びながら女優という仕事も両立できてしまう。本当のことは分からないが。スポーツ選手なら大谷翔平選手だろうか。

最近ではネットの影響で、しんどいけれど本当は大切なことを拡散しても全く支持されず、たたかれ炎上することのほうが多いだろう。そうなることからは、自分で自分を律するというところで、今までは自分は一つのことに頑張るだけでよかったものが、もう一役あるいはそれ以上の自分をコントロールする役目も持たなければならぬ。それら役割を両立以上に担うことができる人だけがチャンスの多い人になつてくると思う。

また優しく接するということは、ある意味責任を持たなくてよい、無責任な気持ちで割り切れるから厳しくする必要もないということになると思う。会社ならパワハラと言われたり、学校なら指導がきつすぎると言われ

てしまったら、今のご時世なら何の抗弁もできないし機会も与えてくれないのが現実だ。イチロー氏はそれを、あえて子どもにとって酷くな時代だと表現しているのだと思った。

例えば「職人や料理人の修業に、優しきは通用するんやろかな」とある料理店の若大将は二五歳で昼だけ営業の店を任されている。昼営業が終わると大ボスの店で修業をして、一日一七時間以上も料理のために頑張っているのだとか。極端な例かもしれないが、若大将は、自分の店の食材に自信を持っていて詳細に説明できるし、その素材をわざわざ見せてくれるそう。その態度は自信にあふれ、とても二五歳には見えないそう。また寝る間も惜しんで長時間働くことに関しても、あと五年で大親分から暖簾のれん分けして独立したいと思うから、全く苦にならないとも言っている。若大将の厳しい環境はさておき、大ボスの責任をもって修行させ、昼間だけでも店を持たせ、さらに大ボスを超える料理人の育成をさせようとする姿が垣間見える。

理解していただけるかは分からないが、真の指導者とは成果を上げられる人を育てるのでなく、自分の存在をも超える人材を育てる人のこと。だから当然そこには本気の責任があるので厳しい場面もあると考える。もちろん、体罰、真のノウハウは否定するという前提で。

古希を過ぎて……、終わりの始まりであったかもしれない。しかし、サ

ミュエル・ウルマンの言葉を思い出し、「青春とは人生のある時期を指すものではなく、心の持ち方を指すものである。」 *Молодость относится не к определенному периоду жизни, а к образу мышления.* したがって古希は終わりの始まりではない。終わりの途中でも終わりの終わりでもない。自分の体の健康を維持しながら、どうあれ願わくは機関車のような職人のような役割を担い続けながら、まだ夢の途中でいたいと思う。

ネット空間にはツイッターやブログが溢れ、一億総文字発信ともいえる時代。誰もが限られた字数で伝える技術を求められる時代。本当のエピローグは未だ先において、自分の書きたいことを自由に書く機会を与えて頂き感謝している。私の至らなさにより納得いかない部分もあるうかと思うが、どうぞご容赦願いたい。

